

【 実践報告 】

「授業をする」ことを目的とする援助技術演習の実践

溝 渾

1. 社会福祉援助技術の教育をとりまく現状

平成21年度より社会福祉士国家試験受験資格取得にかかるカリキュラムが改訂され、本学でも徐々に新カリキュラムに対応した授業が開始されてきている。一方で、新カリキュラムの導入が、必ずしもあらゆる面においてスムーズになされたとはいえない現実もある。例えば、実習指導者の資格要件が定められたことによって、実習先の確保が難しくなったり…と、特に「相談援助実習」および「相談援助実習指導」の授業内容および実施体制の構築については、本学に限らず、多くの養成校が苦慮しているところである。

以上のような状況の中で、さらには、近年文部科学省によって進められてきている大学教育改革の流れも相俟って、社団法人日本社会福祉士養成校協会が相談援助実習指導のミニマム・スタンダードを作成したり、また、「相談援助実習ガイドライン」の作成に着手したりしている。このミニマム・スタンダードやガイドラインを共通基盤としながら、養成校と教員、実習先施設・機関および実習指導者、学生、そしてなによりも施設・機関の利用者の4者が連携し、実習教育の質の保証などを実現していくことが意図されている。

もちろん、このミニマム・スタンダードの導入にはまだまだ課題も多い。筆者が参加した2010年度社会福祉士養成校協会中四国ブロックセミナー（平成23年2月26～27日、於聖カタリナ大学）においてもその必要性などについて養成校や現場職員間で活発な議論が交わされた。導入を通して段階ごとの達成課題や評価基準が明確になるという意味では期待できる部分がある一方で、教育機

関や施設・機関の社会的責任が重いものになり、負担も大きくなるといった懸念も表明された。いずれにしても、カリキュラムの改訂に伴い、また、実習に係る一定の基準が示されることで、本学を含めた各養成機関や施設・機関において、社会福祉の従事者養成のあり方について改めて考え直す必要性が生じていることは間違いないところである。

2. 試みの意図

だが、これらミニマム・スタンダードやガイドラインによって示されている内容の中で、筆者にとって今ひとつであると感じられる部分がある。それは、実習の内容や成果を他者に伝達する機会が少なく、また、手法が多様ではない点である。多くの場合、それらは実習報告書の原稿を作成すること、そして、実習報告会を開催し、学生がレジュメやプレゼンテーションソフトを用いて発表することのみに終始している。いくつかの大学における実践のように、施設・機関の実習指導者が実習報告会の場に招かれるといった工夫も見られるが、実習の体験や経験を報告会形式で伝えるという基本のコンセプトには変化がない。

筆者も含めた教員の立場から、誰かに何かを「伝える」ことについて考えたとき、最もたいへんな作業であると同時に学びとなるのは、「授業をする」という機会である。授業をする立場にあると意識することで、「自分自身が、伝えるべき内容について他の誰よりも理解しておかなければならない」といった義務感が生じる。また、当該内容を誰にでも、そして、よりわかりやすく伝えるには

どうすれば良いのか…という形で、その伝達手法についてもさまざまな工夫を講じるようになる。その結果、伝えようとする内容に対して、意識しながら綿密に復習をしたり、そのことで、これまで以上に学びが深まったり…といった形で、自主・自立的な学習が促進されるというわけである。

このような認識のもと、筆者は社会福祉援助技術にかかる授業の機会に、学生が学生に対して授業を実施し、学びを深める機会を用意しようと以前より模索していた。幸いなことに、カリキュラムや時間割の都合なども含めたさまざまな偶然が重なり、平成22年度の授業において試行的ではあるものの、このような機会を持つことができたのである。以下はこの授業実践の経緯をまとめたものである。

3. 概要

本学では平成19年度より介護福祉コースを設置している。定員が20名と限られているものの、このコースで学んだ者は卒業と同時に介護福祉士の資格を取得することが可能となった。筆者はその科目のうち4年次に開講される「社会福祉援助技術C」および「社会福祉援助技術演習C」の担当者であった。特に「社会福祉援助技術演習C」については、すでに3年次の時点である程度の内容を一通り終えている（社会福祉士国家試験受験資格取得のための科目「社会福祉援助技術演習」があった）こともあり、前述したように、学びの発展を意図した授業の実施という課題へ挑戦する機会として絶好のものとなった。

次に、学生が授業を実施する対象を設定することが課題となった。受講者は介護コースの4年生であることから、介護の基本的な知識や技術を必要としている者が候補となる。授業の実施時期やカリキュラムなどを考慮に入れた上で最も適していたのは、「社会福祉援助技術現場実習」において介護技術が多少なりとも必要とされる実習先に赴く学生（主として3年生）であった。本学では従来から、実習に赴く学生に対して、授業時間を活

用しながら介護技術を練習する機会を確保していたが、実習の準備や時間、場所の確保、人材の確保の難しさなどから、必ずしも十分であるとはいえない現状であった。そこで、学生による授業の実施という試みに介護技術の練習をリンクさせ、受講者および対象者の両者がこれまで以上に学びを深める機会を提供することを意図したのである。

平成22年度の3年生は時間割の都合から、火曜日の履修科目がほとんどなく、多くの学生にとって都合のつきやすい曜日となっていたことも幸いした。さらに授業を行う介護福祉コースの4年生もカリキュラムの都合上、4年次で「社会福祉援助技術現場実習」を履修しており、かつ、4年次に最後の介護実習（介護実習Ⅲ）に赴くことにもなっていた。4年生にしてみれば、①自分たちも社会福祉士の実習に行っていることから、どのような介護技術が求められるのかについておおよその見当がつくこと、②最後の介護実習を迎えるにあたって、自分たちが授業をする立場になることで自らの技術をチェックしたり学び直したりする機会が得られることなどの面で多くのメリットがあった。

以上の経緯を踏まえ、本授業は次の通り実施していくこととなった。

【授業科目名】

「社会福祉援助技術演習C」（4年次後期）および「社会福祉援助技術現場実習指導」

【授業の内容】

これまでの授業で学んできた知識や技術を基礎に、受講者が介護技術に関する授業を企画し実施する。対象は、「社会福祉援助技術現場実習」の後期実習において、介護技術が求められる実習先に赴く学生（3年生、計14名）とする。

【実施の時期と場所】

後期実習開始前の火曜日（平成22年10月26日および11月2日の両日）、1コマ～4コマを活用して実施する。同じ内容を2回繰り返して実施する。3年生は都合の良い日のどちらかに終日出席。場所は本学7号館3階、介護実習室とする。

これらの基本線が決まったところで、「社会福祉援助技術演習C」の授業時間を活用し、授業内容の

組み立てを行った。なお、授業担当者は、社会福祉援助技術の授業であることを考慮し、ソーシャルワークの基本的な展開プロセスにある程度沿った形で授業を進めていったことも付言しておきたい。

4. 授業の進行

(1) ニーズ・アセスメント

授業計画を立てる前にまず、介護技術について実習生がどのようなニーズを持っているのかについて調査することとした。これをソーシャルワークの展開プロセスに沿って表現するならば、いわゆる「アセスメントの段階」ということになるだろう。前述の通り、授業を実施する4年生介護コースの学生(16名)たちも「社会福祉援助技術現場実習」の履修者であるため、まずは彼女たちの前期実習での経験を踏まえ、どのような技術に対するニーズがあるのかを考えてもらい、KJ法などを活用しながらブレインストーミングを行った。その上で、必要とされる介護技術をカテゴリー化するとともに整理し、対象者に○をつけてもらう形でのアンケート調査を実施するための調査票を作成した。

「社会福祉援助技術現場実習指導」の時間に調査票を配布・回収し集計した。その結果、「体位変換・移乗・移動・シーツ交換」「食事介助」「排泄介助」「着脱・入浴介助」の4つに対するニーズが多いこと(というよりもこれら4つで介護技術の大部分はカバーされることになるわけだが)がわかった。そこで、受講者16名を4チーム(チームめがね、チーム寮+1、チーム武田、チーム凸凹)に4名ずつ分け、各チームが1つのテーマを担当し、全部で4コマ分の授業を展開することになった。チームめがねは体位変換・移乗・移動・シーツ交換、チーム寮+1は食事介助、チーム武田は排泄介助、チーム凸凹は着脱・入浴介助を担当する。なお、それぞれの授業時間においては、授業を担当しない残りの待機メンバーは積極的にサポート役に回り、授業の進行を手伝っていくことも

確認された。

(2) 授業のプランニング

グループのメンバー及び担当内容が決定したところで、各グループのメンバーは授業内容を検討する「プランニングの段階」に入った。授業時間は1コマ=90分と限られている。まずはそれぞれのテーマに応じて、盛り込む内容の取捨選択のための話し合いを行った。また、これまで学んできた内容について思い返したり、テキストを再読したり、授業の中でわかりやすい資料を配付した教員の元に行き、その資料の出典を尋ねたりするなど、授業の内容をより良くするための積極的な姿勢が多く見られた。その他にも、授業をわかりやすくするためにクイズ形式を導入したり(写真1)図示したりする(写真2)など、さまざまな工夫を凝らす姿も見受けられた。



写真1 クイズ形式での授業



写真2 図示を活用した説明

授業を進める上では、その内容の精査だけではなく、常に時間の流れ（プロセス）を意識することも大切である。そこで、教育実習などで作成する指導案からヒントを得て、授業の進め方のフローチャートおよび役割分担表のフォーマットを用意し、各グループに作成してもらった。自分たちが授業をする内容について、どの項目にどれくらいの時間を用いるか、また、説明する順番はどうするのか、それぞれの内容について誰が説明を担当するのか、その時間は授業を担当していない待機メンバーのグループ分けと配置…など、各グループは綿密な話し合いを重ね、授業の流れを決めていった。それぞれが得意な内容（技術）の部分を担当するように役割をあてたり、また、実技をしてもらう時間に余裕を持たせ、それが多少オーバーしてスケジュールが狂ったとしても、次の項目のところで説明を簡単に済ませてうまくカバーすれば…という形で、われわれ教員がふだん授業計画を立てる際に工夫したり考えたりしているようなことを、彼女たちが実践している姿は非常に頼もしいものであった。限られた時間の中で優先順位などをつけながら内容を精選し、それらをすりあわせた上で段階をふまえた計画を立てていく…という形で、各グループはソーシャルワークの「プランニングの段階」においても考慮が必要とされるような種々の課題に向き合い、それをクリアしていった。

(3) 授業の実践とフィードバック

筆者が今回の試みにおいて重要視していたのは、「対象者を替え、同じ内容の授業を2回実施すること」であった。このことで、①2度の授業を比較検討することによって、実践のふりかえりが容易になること、②1度目の授業の反省を2度目の授業に活かせるというモニタリング→フィードバックのプロセスを踏めることが実現するからである。そのため、授業実践前に各グループのメンバーに評価表を作成することを伝え、盛り込むべき内容（受講者に聴いてみたい内容・質問）について意見を募った。寄せられた意見をもとに、授業の受

講者が記入する評価・ふりかえりシートを作成した。また、授業を行う側のふりかえりのために自己評価シートも作成した。

1回目の授業（10月26日）の終了後に受講者および授業を行った側の双方が評価やふりかえりを行い（シートへの記入）、寄せられた評価に対する検討を翌日に実施した。評価や感想などを見ながらグループで話し合い、あるいは個々の反省点などを明確にし、来週の授業において修正することや変更すること、工夫を加えることなどの確認・共有を行った。各グループが実施した授業の大まかな内容は以下の通りである。なお、受講者は10月26日5名（3年生：岡 亜樹，土居真悠子，永田歩美，山路亜沙子，山本泰葉），11月2日9名（3年生：石川 幸，今岡由貴子，奥田未来，菊池和恵，佐々木瞳，白石あい，高梨見奈，濱崎祥子，吉田奈津美）であった。

- ①体位変換・移乗・移動・シーツ交換（チームめがね）写真3～6
体位変換の説明と実技，車いす移乗の説明と実技，車椅子にて学内を移動，シーツ交換の説明と実技 …など



写真3 体位変換の説明



写真4 移乗の練習



写真7 食事介助の練習①



写真5 車椅子による移動



写真8 食事介助の練習②



写真6 シーツ交換

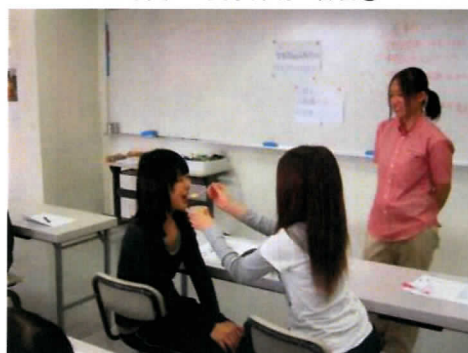


写真9 食事介助の練習③

②食事介助（チーム寮+1）写真7～8

食事の必要性についての説明、嚥下の仕組みについて、食事介助をする上での注意点(クイズ形式)と実技、自助具や補助具の説明と試用、口腔ケアの説明 …など



写真10 自助具の試用

③排泄介助 (チーム武田) 写真 11~14

おむつ交換についての説明と実技, 排泄介助についての説明と実技 …など



写真 11 おむつ交換の練習①



写真 14 排泄介助の練習

④着脱・入浴介助 (チーム凸凹) 写真 15~18

着脱介助についての説明と実技, 入浴介助の説明と実技 (機械浴・一般浴), 入浴後のスキンケアの説明と実技 …など



写真 12 おむつ交換の練習②



写真 15 着脱介助の練習



写真 13 おむつ交換の練習③



写真 16 機械浴の説明



写真 17 一般浴の説明



写真 18 洗い方の説明と練習

(4) 授業の評価

2 回目の授業を終えた後にも、それぞれが評価・ふりかえりシートに記入した。日を改め、これら全ての評価に全員が目を通し、改めて授業全体の評価を実施した。これが「エヴァリュエーションの段階」ということになる。まず、以下に受講者である 3 年生からの評価のポイントをまとめておく。

- ①「授業の内容のわかりやすさ」、「担当者の態度」、「内容がためになったか」、「質問しやすい雰囲気だったか」などの選択式の項目については、ほとんどの受講生において評価が高かった。コメントからは、クイズ形式など、授業する上での工夫が功を奏していたことや、まず模範的な実技を提示した上で練習してもらうという進め方への評価が高かった。
- ②高評価であったことの要因として特筆すべきことは「少人数での授業であったこと」である。

全体を通して、少なくとも 2 人の 3 年生に 3 人の 4 年生という割合で、待機メンバーも含めた 4 年生が必ず 3 年生に付いていた。その上で、即座に質問に答えたり、難しいところは何度も練習したり、実習での現場経験や利用者の特性について話したり…といったことが行われていた。人によって声かけの方法の違いに気づくなど、複数で行われる授業であることでの気づきも多く、また、疑問に思ったり難しいと感じた点がある場所で解決できたことによって学びの深まりを意識できたようである。

- ③実際にやってみることを中心に据えた授業を展開したことへの評価も高いものであった。多くの練習の場で利用者役になってみることで、利用者の気持ちや思いに近づくことができたとの意見が多かった。例えば、機械浴の体験では当初、誰が利用者役をするのかを決めるのに難航していたが、授業が終わってみると受講者から「自分も機械浴を体験してみたかった」という意見が相次いだ。
- ④総じて、実習の中で介護をすることへの抵抗が緩和された、あるいは、この学びを実習の中で大いに役立てたいとの前向きな意見が多く見られた。
- ⑤一方、改善点としては、時間が足りなかったこと（もっとこのような授業をやってほしいとの要望）や、これに類似しているが、説明だけで終わってしまった内容について（歩行介助や口腔ケアなど）も実際に練習したかったという意見が挙がった。

次に、授業を実施した 4 年生の自己評価について、そのポイントをまとめておく。

- ①「授業をうまく進めることができたか」についての自己採点では、やや控えめな評価が多く見られた。また、点数は 2 回目の授業の時のほうが 1 回目の授業の時よりも高いという傾向が見られた。1 回目の反省を 2 目に活かしたという記述が多く見られた。例えば、1 回目の授業で「もっと実技を…」という声があがったことを踏まえ、それを 2 目に活かしたり、ほめることを意識

し、自信をつけてもらうよう心がけたり…といった工夫が行われていた。

②課題となった点については、時間配分や説明の拙さに関する記述が多く見られた。説明については、その場でわかったのかを3年生にしっかりと確認しながらじっくり進めたかったとの意見があった。また、授業中、説明や技術の面で待機メンバーが授業担当者をフォローをする場面が多く見られた。筆者はこれを「チームで授業を展開することの利点である」として肯定的にとらえていたが、4年生の方は「自らの責任を果たせなかった」としてやや否定的にとらえがちであった。もちろんその反面、「皆に助けられた」との感謝の言葉も多く見られた。

③授業の準備から実践、評価までの全般を通して、「自分の得意なところ、苦手なところを再確認する良い機会となった」「自分自身の知識や技術をチェックするとともに確かなものにすることができた」「教えることの難しさを実感した」「伝える喜びを感じる事ができた」といった感想が見られた。総じて、「たいへんなことも多かったが、自らの学びの深まりを実感している」といったところである。

最後に両者の評価を踏まえ、筆者は以下のポイントについてフィードバックを行った。

①伝える、特に「授業をする」ことで深まる学びについて

授業をするという立場につくことは、伝える内容への深い理解、伝え方への工夫、自らの到達度の確認など、学びをより深め、確かなものにすることのきっかけとなること。

②何かをチームで行うことやネットワークを構築することの大切さ

支援はそれぞれの得手、不得手を踏まえてお互いに助け合いながら行われること。また、そのために「助けられ上手」として上達し、多くの人材とネットワークを構築することが大切であること。感謝されるだけでなく、感謝する機会を多く持つようにすること。

③プロセスを意識すること、ふりかえることの大

切さ

授業の企画立案や実施、評価の一連の流れがソーシャルワークの展開過程をなぞったものであること。また、ふりかえりを通して次の課題が見えたり、1回目と2回目を比較することでその違いが把握できたりしたこと。

以上のようにまとめ、各メンバーに一言ずつ簡単な感想を述べてもらった。多くが「良い経験になった」「また挑戦したい」「学びが深まった」というものであった。その後クラスで簡単な打ち上げを行い、この授業は終了となった。

5. 考察と今後の課題、若干のアイデア

これまでの報告を踏まえ、きわめて粗雑ではあるが、筆者が考えたことを記しておきたい。本報告の「2. 試みの意図」において示したように、筆者は従来より、実習の事前学習や実習体験そのもの、さらには実習の事後学習の内容の豊かさに比べて、実習での経験をひろく他者に伝える手法の乏しさに疑問を抱いていた。今回の授業実践は、学生が単に「報告する」ことから「授業をする」という、より高度な手法に挑戦することで学びを深めることを意図していた。筆者の実感および学生の様子を見る限り、当初の狙いはある程度達成できたように思う。あらゆる専門職にアカウンタビリティ（説明責任）を果たすことが求められ、また現在、世の中に広く社会福祉の理念やその従事者の役割や必要性、地位の向上を訴えていくことが求められているのを念頭においたとき、自らの経験や知識、技術を他者に伝える—あるいは伝承する—ための学びを深め、その技術を習得することは、今後の社会福祉教育においてより重要なものになると思われる。

例えば、「相談援助実習」の実施体制を工夫することで、伝える技術への学びをより深めることが可能となる。仮にこれを「相談援助指導実習」と名付けよう。これは4年生が、3年次の実習先において再び実習するものである。その際、1年下の3年生と一緒に実習を行う。4年生は一度その実習先

で実習をしているため、実習先の指導者にかわり、基本的なことがらや作法、マナーなどを3年生に伝える役割を果たす。このような体制で実習を行うことにより、実習先の指導者は学生を一から指導する負担を多少軽減できるだけでなく、スーパーバイザーとしての研鑽を積むことになる。また、3年の実習生は実習指導者だけでなく4年生という、身近な相談相手であり心の支えとなる存在を得ることでより安心して実習を進めることが可能となる。さらに4年の指導実習生は、3年生への指導を通して自らの経験や知識、技術を他者に伝えていくための学びを深め、技術をより確かなものとするのが可能となり、かつ、実習指導者との連携を通し、チームの中で自らの役割を果たすことへの学びを得るというわけである。

もちろんこの「相談援助指導実習」という科目のアイデアは単なる思いつきの域を出ないものであり、その実現には多くの困難や課題がある。例えば実習先の指導者においては、負担が軽減するどころか、より重いものになるとの意見が生じることも予想される。今後も「伝える」技術をどのようにカリキュラムの中に組み込み、ミニマム・スタンダードやガイドラインに反映させていくのかということ課題としながら、授業内容・展開の工夫に挑戦していきたい。

さらにもう一つ、この授業実践の結果の中で強調しておきたいことがある。本報告の「4-4 授業の評価」の②で示したように、今回は、受講者の数に比べ、授業を行う側の人数の多さが成功の大きな要因となったことである。この事実は筆者に次のような考えを想起させることとなった。すなわち、特に技術を伝えることを中心とする授業においては、授業をする側に一定の質が確保されている必要があるのはもちろんだが、そのマンパワーの量（授業を展開する者の人数）も大きな意味をもつということである。また、今回の授業をふりかえてみたとき、常に「質」が「量」を補うわけではないと言えそうだ。つまり、十分かつ高度な「質」を兼ね備えた指導者1名による授業よりも、指導者数名の「量」による授業の方が、

学びの効果が高くなることがある。

本報告の冒頭においてふれたように、現在の実習教育を中心とする社会福祉教育では、教育機関や施設における指導者の質の向上を促進する動きが主流を占めている。しかし、場合によっては複数の指導者のチームによる授業を展開することの方が、きわめて質の高い指導者が単独で行うだけでは実現することができないような教育的効果をもたらす可能性があると考えられる。具体的には先述した「相談援助指導実習」のような授業の実施、さらには、大学における複数教員（TAおよびLA、大学院生なども含む）によるチームでの授業展開も考えられる※1）。先述した課題に加え、少人数を対象にした、複数の指導者によるチームでの授業展開についても、今後与えられた状況の中で挑戦し、その可能性を探っていきたい。

6. 最後

「社会福祉援助技術C」の受講生（受講生全員の名前および写真19を文末に付すこととする）および4年生の授業を受けた3年生14名に感謝したい。また、日頃より介護福祉コースの教育に尽力され、今回の試みに多大な理解を示してくださった本学科准教授の西山美香先生および林 浩文先生、助手の竹川加奈恵先生、さらには昨年度まで介護福祉コースの助手を務められ、2回目の授業時に飛び入りで参加してくださった本学大学院修士課程2年生の佐々木早喜子さんに感謝したい。カリキュラムや時間割の都合上、すでに困難が予想されるが、平成23年度においてもこの試みを継続したいと考えている。

※1 かつて筆者は「社会福祉援助技術演習」において、助手を含めたチームでの授業展開の試みについて報告したことがある（上田智恵・太原牧絵・溝淵淳「チームアプローチによる社会福祉援助技術演習の授業展開—カリキュラム改訂をふまえて—」人間福祉研究第7号 2009）。

平成 22 年度 「社会福祉援助技術演習 C」 受講生 16 名 (順不同・敬称略)

荒木 智子	地主 秀美	堀口 絢加	正重 小侑	(以上「チームめがね」)
岡村 朋子	奥原奈都美	木多 夏樹	下房地可奈	(以上「チーム寮+1」)
岩本 瞳	尾首 由岐	小堤 綾	林出 彩	(以上「チーム武田」)
長野亜由美	花戸 彩	堀田 理沙	三田 絵梨	(以上「チーム凸凹」)



写真 19 介護コース 4 年生全員集合